

○平成二五年度卒業論文要旨

〈日本史コース〉

近世における聖徳太子信仰とその展開

― 朝廷・幕府と寺社の関係を中心として ―

近藤 絢音

一、はじめに

聖徳太子信仰を取りあげた研究はこれまでに、日本史学はもちろんの事ながら、宗教史、美術史、民俗学、国文学など、多方面から行われてきている。しかし、それらが対象としている時代は古代・中世が主であり、近世における太子信仰について扱った研究は未だ少なく、その様相は局所的に把握されているのみであると言えよう。

そこで本稿では、近世における太子信仰の全体構造を説明するための端緒として、近世社会における最上層に位置していた「朝廷」・「幕府」及び、信仰の拠点地であった「寺院」に焦点を当て、考察を行った

ていく。

二、近世朝廷における聖徳太子信仰

広隆寺（京都市太秦）に聖徳太子三三歳の像が伝わる。当像に対し天皇が御袍を寄進し、像へ着装させる儀礼が実施されてきており、主に近世以降の天皇に関して、着装を行った時期などの記録と実際に着装された装束類が残存している。

当御袍着装の儀礼に関して先行研究では、①起源は不詳。後奈良天皇の時代に再興。②歴代天皇の即位式に用いた黄櫨染の御袍と同様の袍を作成し天皇一代を通じて像に着装。③太子の御忌法要の際にも実施された。などの点が指摘されてきている。すなわち当儀礼は、天皇即位式もしくは太子法要に際して実施され、天皇一代ごとに行われた儀礼として定義されていると言えるであろう。

そこで、着装実施に関する記録類について「天皇在位の時期」「即位礼実施の時期」等の項目を立て整理・検討した所、天皇の

即位式と近接した時期に御袍着装が実施され、天皇一代を通じて着装される形式が本格的に成立しているのは、明治天皇以降となっている事が判明した。近世の天皇では、光格天皇のみが安永九年五月十八日に着装を実施し、同年十二月四日に即位式を実施するといったように近接の時期で儀礼を行っているが、後西天皇は即位礼から着装までに六年間の間隔があり、着装の翌年には譲位、東山天皇は即位礼から着装までに十三年間の間隔、桜町天皇は十一年の間隔があり、着装の翌年に譲位、後桜町天皇の場合は六年の間隔があり、着装の翌年に譲位している。さらに、明正・後光明・霊元・桃園・後桃園・孝明天皇の代では着装は実施されていない。

以上のような点から、先行研究で定義されてきているような、即位式に際して御袍が作成され、天皇ごとに一代を通じて着装されるといったような形式は近世では成立していなかったと指摘する事ができる。

もう一つ注目すべき点として、正親町天

皇（後陽成天皇の治世五十七年間及び明正天皇（後光明天皇の治世二十五年間）についての着装記録が残されていない点がある。記録が残されていない要因について、明正天皇は臨時的な女性天皇として即位したため儀礼が実施されず、続く後光明天皇は病で急逝したため実施に至らず、結果として記録が残る事がなかったと推測される。正親町天皇、後陽成天皇に関しても同様に儀礼が実施されなかった結果、記録が残されていないと仮定すると、当儀礼は、後奈良天皇の代に再興されたもののその後途絶し、後水尾天皇の代で再び再興されたものと推測される。

また、当儀礼について『続史愚抄』・『月堂見聞集』及び『天皇皇族実録』類に収録された公家日記類の内容を見ると、東山天皇の代で実施された着装儀礼の場合では、広隆寺側からの御袍着装を希望する申し出を寺門伝奏の清閑寺家が受け、着装の儀礼が実施されていた。また、桜町天皇の代の着装でも、前回着装された御袍が旧損した

事を広隆寺側が申し出た事で着装の儀礼が行われている。以上の記録から、当儀礼は寺院側から朝廷への働きかけによって継続されていた側面があった事が分かる。一方で、後桜町天皇の着装記録では、御袍着装の儀礼について「御代に一度」実施するものであるとの記述が確認される。当儀礼は当時の朝廷内において「各代で一度実施する」という認識も持たれているものであったと言えるであろう。

朝廷と広隆寺との交流事例は御袍着装の儀礼以外にも太子法要、広隆寺開帳の際の文物及び金銀の寄進、法要・開帳時以外の文物の寄進などが確認される。特に後水尾上皇は法要の際の文物下賜、承応二（二六五三）年広隆寺上宮王院僧高任の発願による聖徳太子絵伝全五巻の作成を実施し、中御門天皇は五回に渡る文物の下賜、広隆寺の七社七寺への組み入れ、勅願による上宮王院の再建を実施するなど、後水尾・中御門天皇の治世に交流事例が顕著である。

以上のような事例に加え、広隆寺のほか、法隆寺・四天王寺・橘寺といった太子関係寺院の太子像及び宝物の拝覧が、明正・東山・後桜町・光格天皇・霊元上皇によって実施されている。拝覧の事例は特に法隆寺が五回、広隆寺が三回と多く、四天王寺、橘寺では一回ずつ実施されていた。四天王寺は中世までに太子信仰の中心地的寺院として多くの貴族の参詣を受けた事で知られているが、この宝物閲覧回数からは、近世朝廷では四天王寺以上に法隆寺及び広隆寺が太子関係寺院として重んじられていたと指摘できる。

また、橘寺の宝物拝覧を行った際の記録から、橘寺の宝物拝覧は寺院側からの申し出に端を発しており、さらに参内の可否をめぐり朝廷側で議論が為されている様子が分かる。参内の許可にあたっては寺院の寺格が重視されており、橘寺は自らの寺院の寺格を引き上げるためにも太子関係宝物の拝覧を通じて朝廷と繋がりを得ようとしていたと推測される。

三、近世幕府における聖德太子信仰

四天王寺（大阪市天王寺区）は太子信仰の中心寺院として栄えていたが、戦国・江戸時代始めにかけて二回に渡り倒壊している。天正四年倒壊の際に再建を実施した人物は豊臣秀吉であった。秀吉による再建は、天正十一（一五八三）年から命が下されているが、直後には積極的に再建が実施されておらず、本格的に再建が開始された時期は文禄三（一五九四）年からである事が判明している。再建は寺域の三分の二を再建し、太子絵伝の再作成を行わせる大規模なものであった。そのような方針転換の背景には、四天王寺僧の享順による勧進活動が、晩年仏教へ傾倒していた秀吉へ影響を与えた可能性を指摘する事ができる。さらに寺院再建後の慶長六（一六〇一）年に四天王寺僧中へ下された寺院方針中に四天王寺での勤行を「御太子様昼夜之勤行」と表記している点から、秀吉が四天王寺を「太子を祀る寺院」として重んじていた意

識を読み取る事ができる。

その後慶長十九（一六一四）年大坂冬の陣によって四天王寺は再び倒壊したが、徳川家康は秀吉と同様に再建を実施した。この再建は秀吉のものとは異なり倒壊直後から本格的に再建が実施され、倒壊以前の規模に及ぶ再建と太子絵伝の再作成が行われた。このような熱心な再建の背景には、家康が太子を軍神として信仰していた思想性があると考えられる。

四天王寺再建をめぐる動向と同時期に当たる慶長十三（一六〇八）年、板倉勝重によって『十七条憲法』の開版事業が実施されている。開版を実施した意図について、当慶長十三年開版『十七条憲法』の奥書を見ると、当時京都所司代であった勝重が奉行に対して京都の法令を正すよう伝えたのち、天下の人々に法度を知らしめる事を目的として『十七条憲法』開版を実施したといった内容が記されている。さらにその際、一般の人々の理解を容易にするように、明経博士清原秀賢に訓点の加点を実施

させた事が分かる。以上の経緯から、当開版は勝重が京都所司代の立場から人々に法を広める事を目的として実施した法制政策の一つとして位置づけられると考えられる。

以上のように近世初期に当たる慶長年間にかけては、太子の思想性などが重んじられ、積極的に受容されている傾向があった。その後幕府体制が確立し、文化的発達が顕著に見受けられる元禄七年において、江戸で法隆寺の開帳が実施されている。当出開帳は、徳川綱吉が行った仏教重視政策の一環であった寺社援助事業の一環として捉えられてきた。しかし、出開帳の際の行程や出来事を記録した史料『江戸開帳之記』を基に作成された「元禄七年法隆寺江戸出開帳年表」の内容を見ると、幕府が法隆寺を援助した背景には、法隆寺にかつて家康が戦勝祈願をしたという由緒に加え、門跡寺院である中宮寺の後ろ盾が存在していた事が分かる。また、法隆寺僧達は江戸滞在中、上位から無位まで多くの武家の邸

宅へ宝物を持参して訪問しているが、特に法隆寺僧達を歓迎し、太子関係の宝物を収納するための筐などを寄進するなど、太子を盛んに信仰していると推定される人々が、開帳を行う場所を借りる際の取り次ぎを行っている。以上の点から、法隆寺が江戸で大規模な開帳を実施する事ができた背景には、江戸においてかねてより太子を信仰していた武家などの存在と支援があったと考える事ができる。

四、おわりに

以上、本稿では近世における朝廷・幕府と太子信仰との関わり及び太子の受容について、検討を行った。両者の検討を通じて、朝廷では広隆寺を中心とした太子信仰・受容の体制が後水尾天皇頃から確立され近世を通じて維持され、一方幕府では徳川家康が有していた太子を“軍神”として信仰する風潮が少なくとも元禄期頃までは引き継がれ、関連する由緒を有する四天王寺や法隆寺との関わりを有する体制が存

在していたと考えることができる。このような上層部における信仰・受容体制の下で、民衆間における広域に渡る太子信仰・受容が展開していた。古代・中世において興隆した太子信仰・受容は、従来までに言及されてこなかった近世という時代においても形態を変化させながら、衰退することなく維持され続けていったと言えるのである。

〈アジア史コース〉

隋末の各勢力と閼隴政治集団

王 思 慧

はじめに

閼隴政治集団とは、六世紀前半に宇文泰に従って現在の陝西、甘粛一帯に移り住んだ鮮卑系武人と土着の有力漢人が融合し形成した統治集団のことである。陳寅恪氏の著作「唐代政治史述論稿」によると、八柱国・十二大將軍を中心に形成された統治集

団は、北周、隋そして唐王朝において中国を統治したとされる。日本においては、この説は布目潮風氏、氣賀澤保規氏らに継承され、現在ではほぼ定説になっているといえる。しかし、これに対して山下將司氏は、八柱国・十二大將軍という門閥序列は唐において創出されたものであると批判した。本論では、反乱者を官僚、貴族と庶民（農民）の三つの社会階級に分けて、隋から唐への移行期にいかなる特徴や性格を持つのかについて考察する。

第一章 楊玄感の乱

楊玄感に連なる弘農楊氏の系譜を考察したところ、暉、恩、鈞、暄は中級からやや上級までの官職を務めていた。玄感の祖父・敷はその祖父・鈞の臨貞県伯を受け継ぎ、北周が建国されるとさらに公まで進んだ。このように、楊氏一族は歴代官僚を輩出したが、官界の第一線に進出することができたのは、玄感の父・素である。楊玄感の家系は西魏に確立した八柱国・十二大將